

IFLA ジャーナルの紹介と カーネギー国際平和財団の国際心キャンペーン

Introduction to IFLA Journal & The Carnegie Endowment for International Peace International Mind Campaign

スティーブン・ウィット

Steven Witt, PhD; Associate Professor,
University of Illinois at Urbana-Champaign,
Visiting Research Professor, Hitotsubashi University

〈序論〉 IFLA ジャーナルについて

IFLA ジャーナルの目的とねらいについて

雑誌のスコープ（視野、方向性、範囲）

- ・ 図書館情報学サービスと図書館を通じての情報へのアクセスに影響を与える社会的、政治的、経済的事例について相互評価をおこなった記事を掲載している。
- ・ 国際的レベルで専門職の幅広い見方を反映する研究や事例研究、エッセイなどを出版している。



40年以上にわたって、IFLA ジャーナルの編集者たちは国際図書館連盟（IFLA）の仕事と使命を反映した論文記事を出版する努力をしてきた。ジャーナルの前編集委員会の委員長であるジェリー・W. マンスフィールド Jerry W. Mansfield が語ったように、この出版物は IFLA ジャーナルの歴史をたどるものであり、IFLA 活動の歴史的経緯を示すことから、図書館司書や情報専門職たちが直面する課題を検討するための相互評価するジャーナルとして、情報社会での役割を審査し、コミュニティを改善し、図書館サービスを含めて発展させ、経済的發展を支援し、知識へのアクセスを拡大させ、図書館や世界の人々に影響を与える地元や国際的な政策に積極的にかかわっている。(Mansfield,

2014)⁽¹⁾

IFLA ジャーナルの幅広い任務は、現状に影響を与える研究をすすめている地球規模での図書館や情報専門職の声にあわせて長期間にわたって専念し続けることにある。IFLA ジャーナルの成功は、現場で働いている人々や学術研究者たちが参加するところにある。

今回の講演では、このジャーナルのスコープについて、さらに IFLA に関わっている人々のコミュニティが、この学術的ジャーナルを通じてどのように動いているかを話すことになる。

.....
国境を越えて専門職を支援する

- ・ 情報へのアクセスの危機的状況にあるニーズと知識生産を促進する図書館の役割とを喧伝する
- ・ 情報へのアクセスに関するリヨン宣言
- ・ 専門職のあいだでの対話の声を出版し貢献できるアクセス手段

.....
もし、誰かが過去の学術出版物を見直してみれば、頻繁にこのジャーナルから引用されていることがわかるだろうし、また、多様な著者たちやその見方、取り上げている課題は、この分野の文献の範囲内におさまっていないことがわかる。このジャーナルのウェブサイトで取り上げられている中で、最もよく読まれている記事のいくつかをよく調べてみると、このジャーナルが取り上げている範囲以上に深く広いものであることがわかる。時期を得たトピックに焦点をあてた論文記事では、例えば、表現の自由や文化遺産、発展、少数民族に関する知識、専門職の間でのリーダーシップ、専門職としての実際を伝える世界中の見方などがある。

ナカタ Nakata が書いた顕著な論文記事「少数民族の知識と文化的インターフェイス」Indigenous Knowledge and the Cultural Interface は、IFLA ジャーナルで最もよく読まれ続けているものであり、コルテイ Koltay が書いたものはデータ管理の実際に関する知識について、専門職が新しく主導権を握り得るものであることを掘り起こしたものである。(Nakata, 2002 ; Koltay, 2016)⁽²⁾ これらの論文記事は、地球規模での専門職の強さを反映するものである。情報へのアクセスを必要不可欠とすることや、図書館と協働する組織団体とが知識の産物を形成するといった重要な仕事は、研究成果を入手できることやこの分野でのエビデンスといったことを予言していることといえる。

「情報とアクセスと発展に関するリヨン宣言」は、2014年に世界図書館情報会議で採択されたのだが、世界中の文化や社会で、この専門職の役割を主張し喧伝する厳しい手始めとなったのである。(International Federation of Library Associations and

Institutions, 2014)⁽³⁾ これは、図書館と共に活動を進めていこうとする団体など300をこえる団体がこの宣言を批准し、国連参加国に2015年以降の開発目標の枠組み⁽⁴⁾への情報へのアクセスを統合していくことを呼び掛けたものである。2014年のリヨン宣言は、図書館専門職の大きな希望と理想を示すものであり、うまくすれば、これから何年にもわたって開発目標に影響を与えるだろう重要な「UN2030」⁽⁵⁾ の話し合いに、専門職の声を付け加えることができる。(Bradley, 2016)⁽⁶⁾

現場で働く者たちは、自分たちの経験を翻訳する術と資源との両方にアクセスし、広く世界中にいる専門職の聴衆にその仕事の影響を与え、うまくイニシアチブをとる必要がある。「国連2030持続可能な開発目標」については、IFLA ジャーナルでは、全体として図書館情報専門職の専門性を反映させる狙いがあり、多様な研究方法や、理論的方向性、IFLA ジャーナル会員の広さと深さが許す限り、それらを反映するような探求レベルを確保しようとしている。

.....

IFLA ジャーナル

出版

- ・ 7 言語での抄録
- ・ 採択された著者の原稿は無期限で保存される
- ・ 記事はオンライン <http://ifl.sagepub.com> で出版され、www.ifla.org でオープン・アクセス。

専門職としての研修

- ・ 2019年アテネで研究と評価のワークショップ
 - ・ “どのように出版するのか” について年次大会での分科会
-

このジャーナルでは、IFLA の会員による研究のためのツールにアクセスし、橋渡しできるような研究に向けて、さらに努力し続けられるようなノウハウを増やしていこうとしている。図書館司書たちは、その所蔵している組織や地域社会といったところで、研究者とよばれることが増加している。この研究は図書館司書たちが、地域でのパートナーと共に、問題点を洗い出し明らかにしていくためのエビデンスを基礎とする研究手法をとっており、その影響を測り、政策決定者やさらに広範囲の専門家たちと結果を共有するからである。

図書館司書たちは地域での研究調査を指導的に行い、現実生活に影響を与える文書を求める補助金申請を行うことも多い。多くの補助金提供者たちは、計画の広報や政策決定者の参加、あるいは地域社会の参加を求める。これらの要求を満たすため、図書館司書たちは研究手法を理解し、採択することが出来る必要性に迫られており、そのことで

地域社会と協働して研究を創りだし、そのプロジェクトをわかりやすく説明して、結果を実際におこない、政策にしているくように知らしめるのである。

社会科学系図書館部会と協働して、IFLA ジャーナルはワークショップを連続して実施し、参加者に現実生活での研究をどのようにすすめていくのかといった手法を説明し、経験上発見したことを実例として説明し、その結果を出版公表するようにしている。

これらのワークショップでは、学生たちに手法とツールとを紹介し、それらを使って計画をたて、実際におこない、批判的な質的研究や組み合わせた研究を伝えている。参加者は多様なデータ収集手法の強みと弱点を探究し、その手法を活用し組み合わせていくことの戦略手段を評価していく。ワークショップでは、研究の企画に焦点をあて、コミュニティの参加を促し、徹底的なインタビューやグループに焦点をあてること、調査、参加者の観察手法、そして過去の記録調査といったことをおこなう。ワークショップの多くは、研究計画やデータ収集にテーマを設定し、参加者たちがプロジェクトやコミュニティでの課題を企画し、その研究の質の評価と分析が政策決定者やさらに広く専門職集団に結果を公表するようにしている。IFLA ジャーナルの編集委員会は、ギリシャのアテネで開催される国際図書館情報大会 (WLIC) 2019⁽⁷⁾で、最初のワークショップを主催するつもりである。また、他の組織団体とパートナーになって、同じようなことを主催し、実施していく予定⁽⁸⁾である。

.....

〈本論〉

国際心を創り出す；本と対話、文化交流を通じて平和とグローバル社会を推進する (1912-1954)⁽⁹⁾
 Creating the International Mind: Promoting Peace and the Global Society through Books, Dialogue, and Cultural Exchange (1912-1954)

.....

今回の講演は、国際主義に重点をおく国際心形成のために、世界中で世論を変える目的でカーネギー国際平和財団と図書館間でのパートナーシップについて焦点をあてておこなうものである。

このプロジェクトは1912年に開始され、1952年までには消滅していったものであり、様々な国際主義の時代と二つの世界大戦で残っていったものである。このプロジェクトは世界中に国際関係クラブの創設や、国際研究といった学術分野の発展、学術交流や教育的プログラムといった複数の会議の財政支援といった複数の方向にわたるものではあるが、本日、私が基本的に焦点をあてるのは、米国の地方や五大大陸の国内で創設され増加されていった図書館コレクションとしての国際心コーナー International Mind Alcove⁽¹⁰⁾についてである。

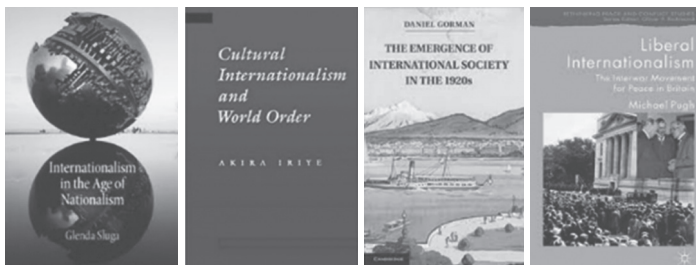
このコレクションはエリート層にのみ対象としたのではなく、学術的共同体、あるいは

は直接、国そのものに関わろうとする意図があった。米国における地方全体や財団が様々な国際的プロジェクトで関わっている多くの国で、人々の認識に基づく行動を変化させようとの意図を持っていた。

この種のアドヴォカシーは、歴史研究者である入江昭⁽¹¹⁾が説明するところの文化的国際主義、つまり、それは“学術研究共同活動を通じて、あるいは複数の国同士の理解を促進する努力を通じて、思想や人との交流を通じて国と人々をつなげていくため行われる多様な活動”を包括するものとなる。文化的国際主義の核となるのは、平和を維持するのは教育と交流により生み出される文化的理解を有する人々が求めることであるという考えなのである。20世紀初頭には、この新しい国際主義が“あらゆる国家や人々による、ある一定の関心をもち参加するグローバル社会”というひろがりつつある認識に焦点をあてたものである。

20世紀初頭の国際主義

“国際主義の言語は、文化的基準を尊重しない人々を除き、人々の国境を越えた社会の境界の拡張・平和と経済成長のためのグローバル・ガバナンス



- ・国境をこえての市民社会ーリテラシー、コミュニケーション、知識の交流
- ・新しい国際組織と専門職
- ・世論の重要性を自制するためのメカニズムとして活用される” (Durant, 2016, p.442)

20世紀初頭の国際主義 Early 20th Century Internationalism

マルコ・デュランティ Marco Duranti⁽¹²⁾が指摘しているように、“国際主義の言語は [第一次世界大戦前後では] 文化的規範を尊重しない人々を除き、人々の国境を越えた社会境界の拡張を自制するためのメカニズムとして活用される”(Duranti, 2016, p.442)⁽¹³⁾ 今回の話では1912年からいわゆる新国際主義あるいは革新国際主義とよばれる第一次世界大戦前後の時期に国を超えて「国際心」を形成するため、カーネギー国際平和財団が努力した活動について焦点をあてる。

国際心のキャンペーンは北米や欧州、アジア、そして南米に国際主義を広めるために本を数多く配ることで行われた。国際平和を維持するための国を超えての努力としての国際主義の役割は20世紀の歴史物語の中でますます重要となる側面である。

グレンダ・スルガ Glenda Sluga⁽¹⁴⁾は、新国際主義とは愛国主義を形成する同じ政治的現実のなかにあるものの、明確に区別出来得るものとして説明している。スルガが述べているように、この国際主義形成はこの時代の社会的・政治的現代化の産物であり、“新しい国際的組織や新しい社交性のある国際的機構、それに〔世論の力をさらに配慮する〕ものを含む。”(2013, p.2)⁽¹⁵⁾ 国際主義は19世紀末から20世紀初頭にかけて、戦争の脅威により活発化したのものであるが、同時に、増大する経済統合や、“広がる情報認識を伴う世論の力や思想が国を超えて広がっていき、活性化したものでもあった”(Sluga, 2013, p.2)⁽¹⁶⁾

このことは国際主義が、“リベラルで、国を愛し、反共産主義者”であり、“強力な西洋国家指導者や、中級階級の女性やフェミニスト、反植民地主義者、社会学者、そして道徳改革者”を包括しており、国際的な関心をもつ考え方を組織化したものだった。(Sluga, p.5)⁽¹⁷⁾

これらの国際主義者の活動前景と背景の双方において、大きな慈善団体が存在した。カーネギー国際平和財団は世界中の世論に影響を与えるためにユニークな幅広い努力をすところ、傑出したものであった。カーネギー国際平和財団は、組織として「国際心」として言及されるものの発展と図書館所蔵資料やメディアを通じての知識の拡散をはかり、広く地球規模で到達することを目的とする学術的ネットワークが人々を受け入れようとした。



Nicholas
Murray Butler

国際心の形成 Forming the International Mind

“固定化した思考や行動習慣というものは、文明世界のいくつかの国を文明化発展の進展や商業や産業発展、世界中に科学と教育を広めるのに協力して同じようにすすめていくことを傍観している”

ネオ・カント主義者であり、「恒久平和」によって影響を受けたニコラス・マレイ・バトラー

国際心とは何か？

第一次世界大戦開戦2年前、ニコラス・マレイ・バトラー Nicholas Murray Butler⁽¹⁸⁾は、『国際心：国際紛争の法的解決についての議論』*International Mind: an argument for the judicial settlement of international disputes* という薄い本を出版した。当時、コロンビア大学学長だったバトラーは、新しく創設されたカーネギー国際平和財団の仕事に深く関わっており、国際交流と教育部門のディレクターとして担当し

ていた。これらの多様な立場と広範囲にわたる政治的かつ学術的なネットワークを通じて、バトラーは世界中の世論を変えようとする幅広い社会的試みを行う努力をし、また、“戦争のための法、大量殺人後の勝利を正当化するための平和、それらの強い力や残虐な軍事力の正当さと正当な理由付けの勝利”といったものにとって代わるだろう国際的な心を育成しようと啓蒙していた。

財団の資源を活用して、バトラーは広く教育広報活動を始め、国際心を創り出そうとした。財団の教育部門業務の大部分は、世界の人々のあいだに国際心を創り出すことにあてられた。バトラーが主張したように、人々は“国際心を理解するべく教えられねばならないし、受け入れ、それにそって国の行動や政策を導いていかねばならない”。

これを受け入れるために、財団は国際法組織を発展すべく活動し、国が平和的にその相違点を調停していく機構を創設していった。活動の多くは情報宣伝活動にあてられた。財団は国際的な学術交流や図書館、そしてメディアを活用し、世界の人々が国家間の問題を平和的に解決すべく国際的な視野を持てるようにしようとするものであった。

例えば、1913年までにカーネギー国際平和財団の職員は、バトラーによるモホンク湖 Lake Mohonk 会議⁽¹⁹⁾での講演をまとめた『国際心：国際紛争の法的解決についての議論』という114頁の冊子を広めようとしていた。財団では財源と十分なスタッフを支援し、この冊子を“選ばれた図書館と個人”に配り、フランス語とスペイン語に翻訳して配布した（財団報告、1914年）⁽²⁰⁾。その年の中頃までに2,200冊が主な北米の国際法の教授や大統領顧問団、議会議員、州知事、アメリカ政治学学会やアメリカ経済学会、アメリカ国際法協会のすべてのメンバーに配られた。

他の研究者達はすぐにこの「国際心」という概念を受け入れた。J. A. ホブソン J. A. Hobson⁽²¹⁾は、1914年に出版した図書『国際政府にむけて』*Towards International Government*で、国際的な心を持つために必要な革命を提案し、“国際関係や経済、社会学、科学、慈善的な組織網により、どこであっても国と国家の限界を超える関心と目的をもつコミュニティとリベラルな心で、試していける”ようにすることだとしている。

(1914, p.191)⁽²²⁾ ホブソンは、“鉄道や配送、郵便、電報、財政的、ジャーナリズムの機構を統合したら、これらのコミュニケーションはさらに進展することで、社会経済的政府が大きな構造となる”と捉えており、“民族や言語、小説の中の文化を一緒にしていくだろうし、新しいアプローチを求めるやり方が相互に関連しあう”としていた。

(1914, p.192)⁽²³⁾

この「国際心」は明らかに西欧的な文明や文化、それに国際関係に関して一般的な見方や結果をもたらす啓蒙的な考え方の役割を反映していた。(Curti, 1963 ; Rietzler, 2011 ; Weber, 2015)⁽²⁴⁾ したがって、国際主義や国際心は西欧の国々から生み出された文明社会の側面を含んでおり、西欧世界の範囲内で実現した平和的使節団を送りだすも

のであった。(Weber, 2015)⁽²⁵⁾ 財団は米国市民社会や西欧社会、それに世界中の人々に国際心のキャンペーンを起こそうと意図していた。バトラーは国際心に関する自分が書いたエッセイ集を、欧州やアジア、アフリカ、それに南北アメリカに住んでいる男性・女性に、広く、さらに拡大しつつあるコミュニティに献呈しており、正義が国家間の違いを安定させる力の均衡をもたらす日が訪れるべき奮闘していたのである。(1913, p.1)⁽²⁶⁾

国際心の社会心理学 Social Psychology of the International Mind

“国際主義は認識されなければならない”(アンリ・ラ・フォンテーヌ、1911年)

“国際関係とビジネスについて考える以外のものは何もないし、また、これらに対応することとは、文明の発達を支援するのに友好的で、かつ共同で平等としての文明化した世界のいくつかの国において、世界中で啓蒙と文化を広めることである”

(ニコラス・ムレイ・バトラー、1912年)

“情報理解が一般的に広がっていくことは、共通理解の可能性を拡大してきたことであり、共通の理想を発展させてきたことであり、共通のコントロールに帰してきたことである”

(W. B. ピルスバリ、『ナショナリズムの心理』1919年、p.293)

“国際連盟の目的は… 国際心の創設であり、正しい世論を創り上げることである”

(J. C. マックスウェル・ガーネット 国際連盟事務局長 1926年)

国際心の心理的基礎 The Psychological Basis for the International Mind

最初から、国際心の運動は、正しい本を読むことが認識の変化を導き、行動の変化をもたらすものだという信念から行われていた。本質的には大規模で実行された知覚的セラピー方法であった。

欧州では、ベルギーでのドキュメンタリスト活動の指導者であった、アンリ・ラ・フォンテーヌ Henri La Fontaine⁽²⁷⁾ とポール・オトレット Paul Otlet⁽²⁸⁾ が世界の知識を組織化するために書誌を活用すると考え、国際主義と平和とを推進した。(Rayward, 2003)⁽²⁹⁾ 1911年3月にラ・フォンテーヌが国際的組織の事務局基金を探す際に、カーネギー財団からの基金を求めている。ベルギー国会議員という立場を利用して、ラ・フォンテーヌは『世界の福祉は最高の法律である』*Salus Mundi Suprema Lex* (1911) というタイトルの短いエッセイを活用した。ラ・フォンテーヌは無秩序な国際システムの問題点を概観し、“事実”と“組織”を使って説明して平和への流れを変えるための方法を提案した。ラ・フォンテーヌは“われわれは[平和と]矛盾する事実と反論しなければならないが、特に人々の間に存在している無秩序とみなしていることを否定する組織を創設しなければならない”(1911, p.1)⁽³⁰⁾

ラ・フォンテーヌは“散在している”特別な団体の小さなグループが“処分されてしまふような内在されている力を認識することができるし、その力は国際主義と呼ぶものである。それは平和をもたらすもっとも強い力である”として組織を創り上げることを推進した。(p.2)⁽³⁰⁾ ラ・フォンテーヌがつかった言葉は、バトラーらが国際的意識を作りだそうとして使ったものとかかなり似ていた。

国際心といった概念の基礎をなすものの多くは、ジョージ・ミード George Mead⁽³²⁾のいう自身を社会的に構築するための心理学的理論であり、国家の国際主義や文明に応用されたものであった。(Fischer, 2008)⁽³³⁾ ミードは自分が書いた論文「国際主義のための心理学的基礎」Psychological Basis for Internationalism で軍国主義と愛国主義は、“広く心理的な問題であり、なぜなら対応の変更とならざるをえないものであり、社会のすべての国際的構造を受け入れようとする思いになるからである”(Mead, 1914, p.605)⁽³⁴⁾ 国家としての社会的心理であり、かつ国際心を発展する活動を知らしめる地球規模での思想と対応での知覚的变化に影響をもたらす力の両面での概念である。

この社会的試みは大規模で、人々が利己主義や自らの行動の変化を意識させようとするものとなった。図書館と本を広めることは、このプロジェクトでの中心となっていた。

国際心コーナー資料

International Mind Alcove Collections

THE NEW HAMPSHIRE PEACE SOCIETY
FEBRUARY, 1918-1919
Mary N. Chase, Secretary
In spite of the handicap of war conditions, I am happy to report that something has been accomplished the past year to promote international good feeling.
INTERNATIONAL MIND ALCOVES
Last year I reported that books had been sent to fifty libraries in New Hampshire as a nucleus for an International Mind Alcove. Mr. J. W. Hamilton, of St. Paul, Minn., conceived the timely idea that a section in libraries should be devoted to this purpose. The Carnegie Endowment for International Peace furthered the movement by promising to send books, free, to any part of the world, as long as the books listed. They also agreed to send beautiful hand-made cards, the one on The International Mind to be placed near the books to attract attention. "The Road of Jumble Fusion," by Comon, and "The Restoration of Europe," by Alfred H. Fried, are, perhaps, the most notable of the books sent, although all are excellent and up to date. I am pleased to be able to put on record that the books and cards have been sent this year to the following places in Canada:



平和を受け入れるために公共図書館を利用しようとする動きは、図書館専門職や平和活動団体の間で広まっていった。

ワシントンDCの公共図書館員だったジョージ・ボウワーマン George Bowerman といった司書たちは、国際主義を通じて平和を推進するために図書館界を説得した⁽³⁵⁾。1915年初めには、カリフォルニア州バークレーで行われたアメリカ図書館協会大会で、「平和運動や似たようなプロパガンダのために図書館の支援をどれくらいおこなうべきか」としたエッセイを表明した。ボウワーマンは、第一次世界大戦勃発後、平和をもたらすために、図書館が強く喧伝すべきかという自らの問いかけにこたえている。講演で、彼は特に図書館専門職は、カーネギー財団のような組織を強く支持し、歓迎すべきであり、平和を喧伝するため図書館プログラムや出版などを提案している。さらに、彼は図

書館が国際力を推進するための図書を取りあげるべきだとしている。

国際心コーナー初期の変化や発展、採用

- ・ 成人向け1120冊
- ・ 子ども向け447冊
- ・ 米国、欧州、中南米、中東、アジア関係図書
- ・ 1918年から1944年出版の650冊の図書
- ・ 米国一地方のアメリカ人に焦点をあてる
- ・ 海外一エリート層、国際的な学校や大学、都会センター



国際心コーナーの初期の変化や発展、採用

Early Evolution, Growth, and Adoption of the International Mind Alcove

1917年、ミネソタ州セント・ポール市の J. W. ハミルトン J. W. Hamilton やニュー・ハンプシャー州のアンドーバーのマリー・チェイス Mary Chase は小さな公共図書館で多様な国々の資料を発展させ始めており、アメリカ図書館協会でのバウワーマンのよびかけに直接応じるものであった。チェイスは、“カーネギー国際平和財団は支援が続く限り、本を送る、それも無料で世界のどこへでも送ると約束してくれた”と報告している⁽³⁶⁾。

カーネギー国際平和財団の初期の報告では、国際心コーナーの資料は非公式な図書館が主導的におこなうプログラムとして分類されている。1918年の年次報告で最初にふれられており、“国際心コーナーとして企画したものとして始めた図書館があり、国際関係や国際政治を扱う本のコレクションとして収集したものである。場合によっては、部門として図書館を支援して、こういったコーナーの選書をおこない、こういったコレクションの財源提供をおこなった”⁽³⁷⁾。1年以内に、カーネギー国際平和財団は、“国際心コーナーと呼ばれるものを約100ヶ所”設置するのを支援した。

このプログラムはニューハンプシャー州以外にも急速に拡大した。カーネギー国際平和財団は、米国内の地方の図書館に国際心コーナーの資料を送り、大きな図書館システムには財団とともに購入を促すため、国際心コーナー資料リストを提供した。このプログラムの急速な拡大は、図書館から広く支持されたことを示している。

国際心コレクションのネットワーク

Network of International Mind Collections



この地図は、1946年1月3日時点で、米国内で国際心コーナーのコレクション（完成版と“未完成版”）の提供を示したものである。この地図は、当時のカーネギー国際平和財団理事長であるアルジャー・ヒス Alger Hiss⁽³⁸⁾のために、前国際連盟司書で、財団職員であったフローレンス・ウィルソン Florence

Wilson⁽³⁹⁾が手書きで説明を書き込んだものである。1946年までに、国際心コレクションは米国全体の地域に広がっていったことを明らかにしている⁽⁴⁰⁾。

このプログラム開始時には、カーネギー財団の相互教育部門での助手であったエイミー・ヘミンウェイ・ジョーンズ Amy Heminway Jones が国際心コーナーの図書リストを作成し、この財団の仕事の推進目的で広く旅行して回っていた。ジョーンズはこの仕事のまとめ役や助手といった以上の存在であった。彼女は世界中の司書たちと広く文通して、国際的交流を推し進め、国際心コーナーのコレクションによって関係するネットワークを形成していった⁽⁴¹⁾。

ジョーンズの手紙は、米国の地方やアジア、アメリカ大陸、欧州に及び、彼女のユーモアや強い思いを通じて司書たちの間に仲間意識を育てながら、図書配送を実施していった。オレゴン州のベンドに住んでいる司書が、国際心コーナーが読者を驚かせるかもしれないと心配すると、ジョーンズは「他の人々の暮らしはどうなっているのだろうか」とか「旅をしてみたいですか」とかいった他のネーミングを提案している⁽⁴²⁾。また、ジョーンズは国際心コーナーと連動している国際関係クラブ活動の両方を支援するため広く旅行している。彼女は列車で、米国中にある国際心コーナーを回り、ワークショップを開催し、図書館理事会で説明し、司書たちと会議を行っている。ノースダコタ州やジョージア州、インディアナ州、ウィスコンシン州、ネブラスカ州、ミズーリ州、コロラド州、オレゴン州、そして東部の北から南へと訪れている。さらに欧州へ蒸気船で旅をし、アジアや日本を訪問し、中国やオーストラリアまで旅行している。ジョーンズの旅の記録『優しい冒険 *An Amiable Adventure*』は1933年に出版されている⁽⁴³⁾。

国際的な世論



国際的な世論 Global Public Opinion

図書コレクションが世界中に配送されることは、米国市民のものの見方を国際化する努力であり、カーネギー国際平和財団が描く国際主義の夢を国外に広めることが、当初からの国際的な目的でもあった。米国内でこのプログラムが行われる際には、カーネギー国際平和財団は英国やスコットランド、ウェールズ、カナダ、オーストラリア、南アフリカ、インド、ニュージーランド、そして日本の図書館を選び出し、図書コレクションを提供したのである。短期間に、国際心コーナーはカーネギー財団相互教育部門の主たる手段のひとつとなり、財政基盤を定期的に申請し、それからの24年間にわたり年次報告書に記載されるようになった。カーネギー国際平和財団ではこのプログラムを“国際理解と国際関係に関連するすべてにおいて指示な世論を形成し、新規活動や新規方針を議論する際に知的理解の背景として提供するために、この部門が思い通りに行うまさに力をもつ担当のひとつである”⁽⁴⁴⁾としている。

カーネギー国際平和財団が国際主義を推進するのは、米国の海外政策に関しての幅広い議論の一環であり、人々の論議の基盤となる役割となっているからである。そもそもこのプログラムを始めることは、米国の国際連盟参加について、カーネギー国際平和財団の国際主義者たちが使命として実行していくことは、明らかに国際問題から孤立化し、不干渉であろうとする米国において優勢となっていた市民感情に反するものであった。第二次世界大戦勃発直後の時期とは異なり、米国政府は文化外交に関与していなかったし、あるいは国際的になにか関わることを海外における政策や存在を支持する手段としてみなしていなかった。したがって、こういったプログラムを図書館司書たちがアドヴォカシーとすることは、国内外の政策につながる国内の声と反していたのである。この国際心コーナーについての初期の批判は、カーネギー国際平和財団が米国を国際連盟に引き入れようとするものだというのであった。ある記事では、この国際心コーナーを“アメリカ主義に反する国際主義を議論させるものであり、・・・・これらの活動は海外

向けプロパガンダの格付けの下で行われるべきである。財団の目的は、時期を尊重される米国政策を破壊するものである。”⁽⁴⁵⁾としている。

国際心を国外へ

エイミー・ヘミンウェイ・
ジョーンズ

プログラムを運営し、国際心
コーナーと国際関係クラブの
両方を推進するため広く旅行
した。1932年に日本を訪問し
た。



フローレンス・ウィルソン
初代国際連盟司書。

国連退職後、カーネギー国際
教育財団に勤務し、欧州と近
東での国際心コーナーと国際
関係クラブの双方の運営を担
当した。



国際心を国外へ Exporting the International Mind

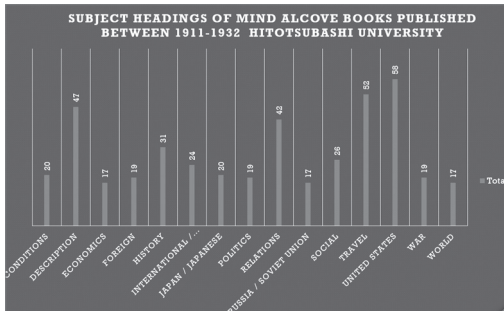
カーネギー国際平和財団の国際心コーナーのプログラム計画は、米国の国内議論に影響を与えようと意図していたこと以上にかなり大きくなっていった。1924年までに、国際心コーナーは米国内で81か所、他国では22か所のプログラムに広がっていた。始めから、カーネギー国際平和財団は米国内と海外とで同時にプログラムを発展させ、推進していき、同じようなやり方でいき、同じような結果、つまり、世界中の世論を変化させることを熱望していた。このねらいを達成するために、カーネギー国際平和財団は、このプログラムを勧めるために海外へ図書館司書たちを派遣したのである。

1927年に、カーネギー国際平和財団は、前国際連盟の図書館司書であり、パリにある図書館学校の講師であったフローレンス・ウィルソン Florence Wilson を中近東にあるアメリカの教育学校に調査のため派遣した。エジプトやシリア、トルコ、ギリシャを旅行し、ウィルソンはこの地域における図書館の運営管理のコンサルティングをおこなない、国際関係クラブや国際心コーナーといったカーネギー国際平和財団のプログラムの可能性について評価をおこなった。これらの訪問では、カイロにあるアメリカ大学から小規模の宣教師が建てた学校までも評価してまわった。米国の地方の公共図書館が参加していたように、中近東の学校は読者の間での国際関係や政治科学や歴史、国際事例についての図書館資料に関心を示した。ウィルソンは、その報告書のなかで⁽⁴⁶⁾、国際心コーナーは中近東の人々の発展に貢献できるだろうし、“専制的な支配者による制限や外国政府の支配を抑え、教育的設備なしには、ここの人々の新しい民主主義の準備として、どちらかというとな暴力的な愛国主義と戦い、国際的な出来事を知る必要がある”としている。カーネギー国際平和財団の米国外で広く受け入れつつある必要な解決策は、米国

の地方での発展とよく似ており、国際心コーナーに図書コレクションを配布して広めることで文化的な出来事や国際的な実践についてお互いに知ることとなる。海外における図書コレクションは明らかに英語を知っており、教育を受けることが出来る知識階級向けであったのだが、コーナーは米国内と海外で、進行中のグローバル社会に参加するための心づもりといった知的基礎としてみなされた。

バトラーが1927年に成人教育活動として報告⁽⁴⁷⁾したように、“偉大な図書館にある情報源や世界中の歴史資料は公開されており、学術研究の共同的努力により利用できるようになった。公共図書館と読書室や国際心コーナー、国際関係クラブは力強くなりつつあり、一つの土地だけにもたらされているのではなく、多くの土地で行われており、人々の心は、力ある最後のリゾート地での現代的な民主主義であり、開かれ、さらに広められ、深化し、すべての国際理解と国際協力を関連づけるものとなっているだろう” 図書コレクションは新しいコスモポリタンの世界観を推進していくための戦略のひとつとなっていたのである。

国際心コーナー資料内容 The Contents of International Mind Alcove Collections



国際心コーナーの資料内容

The Contents of International Mind Alcove Collections

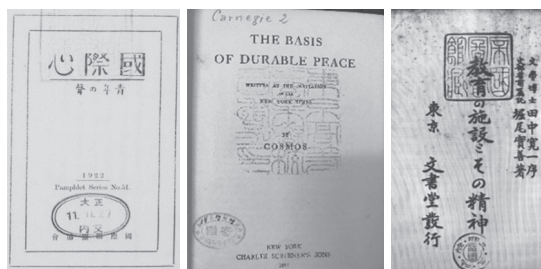
1918年からほぼ50年にわたり、配られた国際心コーナー資料には、1909年から1946年にかけて出版された350冊の成人向け図書と250冊の児童向け図書が含まれている。これらの図書は、人々に国際連盟と国際連合の両方について紹介するものであり、さらに文化や経済、それに国際関係についてよりよく理解してもらおうとするものである。上記の図表は一橋大学が所蔵している158冊の国際心コーナーのコレクションにつけられている件名標目でもっとも頻繁にでてくるものを示したものである。日本におけるカーネギー国際平和財団の活動についてはのちにふれる。カーネギー国際平和財団とのやりとりでは、同じタイトルの図書が北米と南米、それにアジアの国際心コーナーに送られて

おり、欧州と中近東には別の配布リストが作成されたことがわかっている。

件名標目を眺めてみると、これらの図書は、様々な国についての描写や旅行記、国家間の国際的・政治的関係、国際経済について広く焦点をあてたものであることが明らかである。興味深いことに、国として最も頻繁に述べられ議論されているのは、米国や日本それにロシアである。米国についてのタイトルの多くは米国の海外における役割についてであり、他の国との関係や中立についての疑問を呈するものである。日本についての図書については、文化や経済、非軍備、それに日本人移民について焦点をあてている。移民に関しては、一般的にカリフォルニア州における日本人移民について前向きな側面を呈しており、当時、多くの米国で定着していたアジア人移民の否定的なイメージとは異なっている。これらの図書の中には、日本人研究者やジャーナリストによって執筆された図書も含まれている。日本人の著者以外では、欧州人や米国人ではない著者によるものは、これらの図書コレクションにはほとんど含まれていない。

日本における国際心

- ・ 国際心コーナー所蔵資料
- ・ 国際関係クラブ
- ・ 新聞とラジオでの議論



日本における国際心 International Mind in Japan

「国際心」という表現は、日本のYMCAの刊行雑誌である『開拓者』に、1916年という早い時期に日本語で登場している⁽⁴⁸⁾。この言葉は、急速に日本語となっていく、日本の国際関係や国際的な出来事での注目される役割の是非を議論する際の表現として頻繁に使われるようになっていった。

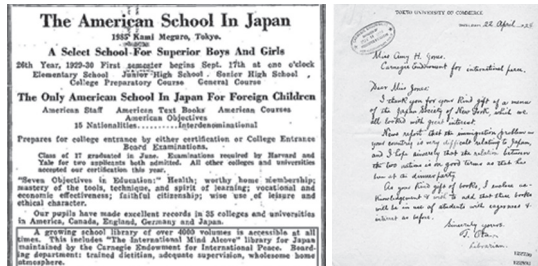
明らかに、日本はカーネギー国際平和財団の国際化と平和を構築する努力の重要な側面を担っていたのである。財団は、前ハーバード大学学長であるチャールズ・エリオット Charles Eliot を含む人々を重要な使節団として1912年に日本に派遣⁽⁴⁹⁾しており、将来的活動の基盤として、例えば東京市立日比谷図書館といったところにプロジェクトを立ち上げる支援とした。カーネギー国際平和財団は、1912年に“特別特使”として日本人法律家岡岡恒次郎⁽⁵⁰⁾を採用し、日本における活動支援と国際主義の成果の報告を提出させている。1918(大正7)年8月、東京商科大学 Tokyo Commerce University(現・一橋大学)が最初の国際心コーナーの図書を受け取っており、そのなかにはニコラス・

マレー・パトラーが執筆した『永続すべき平和の基礎』The Basis for Durable Peace⁽⁵¹⁾が含まれており、すぐに早稲田大学学長の監修のもとに日本語に翻訳された。

日本におけるこれらの図書コレクションの受け入れやどのように読者に刺激をあたえたか、関わる研究者たちのネットワークはどうであったか、国際心についてどのように話し合いがあったのかを、現在の研究テーマとしている。ねらいとしては、東京市立日比谷図書館に寄贈されたカーネギー国際平和財団の図書を調査した吉田昭子氏のような研究者の仕事⁽⁵²⁾の上にさらに積み重ねていくことにある。

.....

日本における国際心コーナー



.....

日本における国際心コーナー International Mind Alcoves in Japan

申し上げたように、1918年までに現在の一橋大学は国際心コーナーのプログラムに参加した。日本で参加しているところのリストには、日本のアメリカン・スクールや姫路女学校、東京市立日比谷図書館が含まれている。残念なことに、国際心コーナーについてのわかりやすいリストはなく、アーカイブとしての記録を通じて、一つにまとめ上げることが出来る程度である。

カーネギー国際平和財団のアーカイブ内には、日本の図書館司書たちとのやりとりが残されている。例えば、東京商科大学（現・一橋大学）の図書館員であった太田（為三郎）⁽⁵³⁾とエイミー・ジョーンズとの間にかわされたいくつかの書簡である。ここに示しているように、1924年4月22日に太田はその年に成立した移民法に不満を表明し、米国へむかうアジア人移民の効果的な排斥を狙うものだとし、日本において国際主義を広めるのに困難な事態を招くだろうとしている。ジョーンズはそれに賛成し、移民法は不公平な法律であり、自分と太田氏は“この事例について真摯に、かつ率直に書いている”ことはともかくにも喜ばしいことだと述べている。

このコレクションについてさらに広く書簡のやりとりや記録を見つけ出そうとしており、日本語の文献の中で、これらのコレクションについてさらに詳しく記録した写真などがあればよいかと思っている。

政治的論争 Political Controversy

アメリカ人としてなら、国際心コーナーといったプログラムは明確に成功といえるの
 だろうが、国際主義は愛国主義にとって代わられるかもしれないと心配する人々からは
 批判を受けるものでもあった⁽⁵⁴⁾。テキサス州ハリンゲンでは、公共図書館理事会で、
 “もっとアメリカ的な図書”が必要だとの議論があったという記事があり、また、“国
 際心コーナーの図書コレクションは人気があるという興味深い報告”があるとも記載さ
 れている。

アメリカ第一主義と国際主義とを並列にすることは、マサチューセッツ州選出議員で
 あるジョージ・ティンカム George Tinkham による議会での演説⁽⁵⁵⁾に強く主張されて
 おり、彼は“一般的な人々を代表しているわけではない情報源からの世論を巧妙に操作
 することは、アメリカ的共和制を腐敗させる毒杯となるだろう”と警告していた。彼の
 議会における演説は、後に新聞で報道され、ティンカムは特に国際心コーナーはカーネ
 ギー国際平和財団による小細工の一つであり、図書館に置かれているこれらの図書コレ
 クションは“子ども向けでさえ”あると述べている。

.....
 第二次世界大戦からユネスコへ

第二次世界大戦中に戦争支援および国内での多文化主義への焦点変化へ

国際連合の創設への支援と、図書館と文化的活動を巧みにユネスコにしていく努力へ

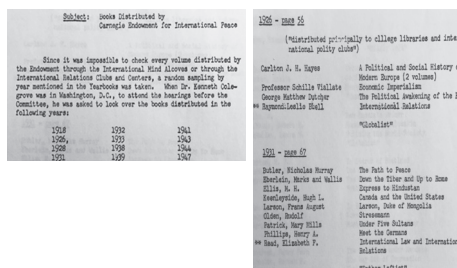
第二次世界大戦からユネスコへ WW2 to UNESCO

国際心コーナーの図書コレクションは、進化し続けており、米国が第二次世界大戦に
 関わっていくように、さらにほかの目的へ変化していった。戦争に対する国際的に対抗
 することへのねらいへと動いていきつつ、国際心コーナーはカーネギー国際平和財団が
 武力に対抗する戦争を考える者を支持していることから世界的な使命へとその強調する
 点が移っていった。つまり、欧州におけるファシズムやアジアや太平洋地域における日
 本の帝国主義の拡大に対抗するものとなっていった。米国内での移行では、カーネギー
 国際平和財団は、国際心コーナーの図書コレクションがもつ、米国内での人種的寛容性
 を形成するための可能性にハイライトを当て始めたのである。

戦争が終結すると、カーネギー国際平和財団は国際連合を強化することを優先してい
 くための戦後努力に焦点を当てていった。国際心コーナーの図書リストはシグリッド・
 アルネ Sigrid Arne が執筆した国連入門書 *UN Primer*⁽⁵⁶⁾ といったような資料を含み
 始め、カーネギー国際平和財団は1946年の報告書で、1944年以降、新規にコーナーは設

置かれておらず、1951年には、図書館に設置するこのコーナーの目的はすべて達成するだろうとしている。

国際心コーナーと冷戦—1954年—



国際心コーナーと冷戦—1954年—

International Mind Alcoves and the Cold War -1954-

1952年になると、米国議会は、課税免除団体がその基金を国としての利害に反するような活動を支持するようなことに使っていないかどうか調査し始めた。コックス委員会やリース委員会⁽⁵⁷⁾の名のもとに1952年から1954年にかけてヒヤリングが行われ、“十分かつ完全な調査と教育的研究がおこなわれ、(中略)連邦政府から収入に関する課税免除されている財団やその他の組織が、その目的のために設定された資源を目的外に使っていないかどうか決定され、特にその財団や団体が反米的で破壊的活動、つまり政治的目的や、プロパガンダ、立法化に影響を与えるとする活動に、その資源を使っていないかどうかを決めるために調査を”行った⁽⁵⁸⁾のである。シカゴ・デイリー・トリビューン紙 *The Chicago Daily Tribune* は、“この国のかかなり大きな財団が国際コミュニケーションなどを含むグローバリズムのプロパガンダに転用されている”と社説で報じている⁽⁵⁹⁾。一方、ニューヨーク・タイムズ紙 *The New York Times* は、この委員会の調査を“行間に半分隠されている学術や研究、思想の自由への危機”であると社説で論じている⁽⁶⁰⁾。

1954年、この委員会はノースウェスタン大学の政治学教授ケネス・コールグローブ Kenneth Colegrove⁽⁶¹⁾に依頼して、1918年から1947年に出版され、カーネギー国際平和財団が配っていた図書のリストを評価させたのである。コールグローブは図書を“国益に反するし、極右に偏りがちである”とした。パール・バックが書いた『大地』 *The Good Earth*⁽⁶²⁾は、“やや右寄りである”とし、ほかのタイトルでは“グローバリスト”であり、“マルクス派”であると分類した。

コールグローブは、カーネギー国際平和財団が配った図書は、国益を推し進めない見方を表現していると結論づけた。

.....
まとめ Conclusion

国際主義と20世紀初頭のグローバル化の歴史のなかでの図書館と専門職の役割とは

- ・新しい世界主義的な規範を確立する支援
- ・国家を超えたネットワーク
- ・“国際政策”を喧伝しようとする国家的力の迂回

不明確な点

- ・プロパガンダ活動としての受け身的なパイプとしての図書館の別の例なのか？
 - ・図書館と財団との関係は何だったのか？
-

国際心コーナーの40年間にわたる活動は20世紀初頭の国際主義とグローバル化の歴史の中で図書館と情報の役割に光を当てるものである。

図書館は「国際心」キャンペーンの中心的役割をはたし、入江氏が示した文化的国際主義を推進する専門職の能力を示すものであり、20世紀初頭の地球規模での情報ネットワークを発展させる支援となっていた。

このプログラムの地球規模での本質と、米国内や欧州、中近東、南北アフリカ、アジア、南米を通じて文化の広範囲な方向性を超えていこうとするものであり、進みゆく世界社会を発展させていく志向でもあった。カーネギー国際平和財団とパートナーとなった図書館は、国境を越えてのパラダイムの枠内で、米国内や欧州、アジア、そして世界各地での同じように国際的戦争が引き起こす問題を診断し、治療していこうとする活動をおこなっていたのである。

ご清聴ありがとうございました。

質問やコメントなどがありましたら、私にご連絡ください。

swwitt@illinois.edu

.....

Steven W. Witt 氏 博士(図書館情報学 イリノイ大学)2019年現在イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 Center for Global Studies 所長兼 International and Area Studies Library (兼日本学図書館) 館長。Beta Phi Mu 2019年 IFLA Scroll of Appreciation 受賞 (<https://2019.ifla.org/honours-and-awards-at-the-ifla-wlic-2019-closing-session/>) *Social science libraries interdisciplinary collections, services, networks.* (IFLA publications; 144) Berlin; New York: De Gruyter Saur, ©2010. *Changing roles of NGOs in the creation, storage, and dissemination of information in developing countries.* (IFLA publications, 123) München: K. G.

Saur, 2006. などの著書のほか、本講演の原論文である Witt, Steven W. (Nov. 2014). “International Mind Alcoves: The Carnegie Endowment for International Peace, Libraries, and the Struggle for Global Public Opinion”. *Library & Information History*. 30(4) : 273-290 のほか、Witt, Steven W.; Kutner, Laurie; Cooper, Liz; Mapping Academic Library Contributions to Campus Internationalization. *College & Research Libraries* vol: 76, issue 5, 2015, pp.587-608. などがある。

注

- (1) Mansfield, J. W. (2014). A brief history of the IFLA Journal. *IFLA Journal*, 40(4), 237-239. <https://doi.org/10.1177/0340035214554169>
- (2) Nakata, M. (2002). Indigenous Knowledge and the Cultural Interface: underlying issues at the intersection of knowledge and information systems. *IFLA Journal*, 28(5-6), 281-291. <https://doi.org/10.1177/034003520202800513>
- (3) Koltay, T. (2016) Data governance, data literacy and the management of data quality, *IFLA Journal*, 42(4), 303-312. <https://doi.org/10.1177/0340035216672238>
- (4) International Federation of Library Associations and institutions. (2014). The Lyon Declaration. Retrieved December 7, 2018, from <https://www.lyondeclaration.org/>
- (5) 訳注：ミレニアム開発目標（MDGs）は2000年にNYの国連で採択され、2015年が達成期限であった。<http://www.undp.or.jp/aboutundp/mdg/mdgs.shtml>
- (6) 訳注：持続可能な開発目標（SDGs）2030 国連開発計画 <http://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sustainable-development-goals.html>
- (7) Bradley, F. (2016) A world with universal literacy. *IFLA Journal*, 42(2), 118-125. <https://doi.org/10.1177/340035216647393>
- (8) World Library and Information Conference; 85th IFLA General Conference and Assembly 24-30 August, 2019, Athens, Greece. <https://2019.ifla.org/>
- (9) How to get published-an interactive e-learning course <https://www.ifla.org/node/92648>
- (10) 訳注：この本論の部分は、以下の論文にもとづくものである。Witt, Steven W. (Nov. 2014). International Mind Alcoves: The Carnegie Endowment for International Peace, Libraries, and the Struggle for Global Public Opinion. *Library & Information History*. 30(4) : 273-290
- (11) 訳注：直訳だとアルコールだが、馴染みがないのでここではコーナーと訳しておく。
- (12) Iriye, A. *Cultural Internationalism and World Order*. (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1997)、p.3 入江昭 著『権力政治を超えて：文化国際主義と世界秩序』篠原初枝 訳 東京：岩波書店、1998
- (13) Iriye, A. *Global Community: The Role of International Organizations in the Making of the Contemporary World*. (Berkeley: University of California Press, 2002)、p.18. 『グローバル・コミュニティ：国際機関・NGOがつくる世界』篠原初枝 訳 東京：早稲田大学出版部、2006 訳注：入江昭（1934～ ）日本出身の国際政治学者。ハーバード大学名誉教授。

- (12) 訳注：Marco Duranti シドニー大学教授 専門は欧州史・国際史
- (13) Duranti, Marco. (2016). European Integration, Human rights, and Romantic Internationalism. In Doumanis, N. ed., *The Oxford Handbook of European History 1914-1945*. Oxford; Oxford University Press.
- (14) 訳注：Sluga, Glenda シドニー大学教授 専門は国際史
- (15) Sluga, Glenda. (2013) *Internationalism in the Age of Nationalism*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. p.2.
- (16) Ibid.,
- (17) Ibid.,
- (18) 訳注：Nicholas Murray Butler (1862-1947) 哲学者 コロンビア大学 (N. Y.) 総長 (1902-1945) ノーベル平和賞受賞 (1931) *International Mind: an argument for the judicial settlement of international disputes*. New York: Charles Scribner's Sons, 1912.
- (19) 訳注：Quaker である Albert K. Smiley 氏が所有していたニューヨーク州 Ulster County にある Mohonk Mountain House で1895年から1916年にかけて国際紛争仲介をテーマとして開催した Lake Mohonk Conference on International Arbitration のことをさす。Cecilie Reid. "American Internationalism: Peace advocacy and international relations, 1895-1916" (Boston College, dissertation, 2005) に詳しい。
- (20) Carnegie Endowment for International Peace. (1914). Minutes of the meetings of the Board of Trustees, 1912-1914.
- (21) 訳注：John Atkinson Hobson (1858-1940) イギリスの経済学者・社会学者。『帝国主義論 Imperialism』(1902) はレーニンに影響を与えたといわれる。
- (22) Hobson, J. A. (1914) *Towards international government*. New York: Macmillan. p.191.
- (23) Ibid, (1914), p.192.
- (24) Curti, M. E. (1963) *American Philanthropy Abroad*. New York: Transaction Publishers.; Rietzler, Katharina. (2011) Experts for Peace Structures and motivations of philanthropic internationalism in the years. In Laqua, Daniel ed. *Internationalism reconfigured: transnational idea and movements between the world wars*. London: I. B. Tauris.; Weber, Peter. (2015) The Pacifism of Andrew Carnegie and Edwin Ginn: the Emergence of a Philanthropic Internationalism. *Global Society*, 29(4), p.530-550.
- (25) Ibid., (2015)
- (26) Ibid., (1913), p.1.
- (27) 訳注：Henri-Marie La Fontaine (1854-1943) ブリュッセル自由大学国際法教授ノーベル平和賞受賞 (1913) 国際書誌学研究所 (国際情報ドキュメンテーション連盟) 設立
- (28) 訳注：Paul Otlet (1868-1944) 国際十進分類法 (UDC) 発案者。情報学者 (ドキュメンテーション) 国際連盟事務局 (現・国際学会連合) をラ・フォンテーヌとともに設立。
- (29) Rayward, W. B. (2003). Knowledge organization and a new world policy: the rise and fall and rise of the ideas of Paul Otlet. *Transnational Associations*, Vol.55, No.1-2, p.4-15.
- (30) La Fontaine, H. (1911). *Salus Mundi Suprema Lex*. Carnegie Endowment for International Peace. New York and Washington Offices. (n.d.). Carnegie Endowment for International Peace. New York and Washington Offices Records, 1910-1954., Volume 35(4078585). Carnegie Endowment for International Peace Archives, Columbia

University Libraries.

- (31) Ibid.,
- (32) 訳注 ; George Herbert Mead (1863-1931) 米国社会心理学者・哲学者。
- (33) Fischer, M. (2008). Mead and the international mind. *Transactions of the Charles S. Peirce Society: A Quarterly Journal in American Philosophy*, 44(3), 508-531.
- (34) Mead, G. H. (1924). The psychological bases of internationalism. *Survey*, 23. 604-607.
- (35) Bowerman, G. F. How Far Should the Library Aid the Peace Movement and Similar Propaganda? *Bulletin of the American Library Association* 9 (1915): 129-133.
- (36) Advocate for Peace. Among the Peace Organizations. (1918). *The Advocate of Peace*, 80(2), 62-63.
- (37) Carnegie Endowment for International Peace. (1918). *Annual Report-Carnegie Endowment for International Peace*. New York: Carnegie Endowment for International Peace. p.76.
- (38) 訳注 : Alger Hiss (1904-1996) 弁護士、米国政府高官。1946年から1949年にかけてカーネギー国際平和財団理事長を勤める。のち下院非米活動委員会に査問される。
- (39) 訳注 : Mary Florence Wilson (1884-1977) コロンビア大学図書館員として勤務後、1919年から1926年まで国連図書館司書を勤める。1927年から1929年にかけてカーネギー平和財団で上級コンサルタントとして国際交流活動に携わる。*The origins of the League Covenant: documentary history of its drafting*, London: Leonard and Virginia Woolf, 1928.
- (40) Wilson, F. (1948). Memorandum Concerning International Mind Alcoves. Carnegie Endowment for International Peace European Center Records, 1911-1940. Box 47.4, Carnegie Endowment for International Peace Archives, Columbia University Libraries.
- (41) Carnegie Endowment for International Peace Records, Rare Book & Manuscript Library, Columbia University
- (42) Carnegie Endowment for International Peace. New York and Washington Offices Records, 1910-1954. Box 306, 1926-1946. Carnegie Endowment for International Peace Archives, Columbia University Libraries.
- (43) 訳注 : Amy Heminway Jones. (1933) *An Amiable Adventure*. New York: The Macmillan company.
- (44) Carnegie Endowment for International Peace. (1927). *Annual Report-Carnegie Endowment for International Peace*. New York: Carnegie Endowment for International Peace, p.27.
- (45) Gen. Herrmann Storms Library; Seizes 4 Books. *Chicago Daily Tribune*. October 27, 1927.
- (46) Wilson, Florence A. (1928) *Near East educational survey; Report of a survey made during the months of April, May, and June 1927*. London: Hogarth, p.15.
- (47) Carnegie Endowment for International Peace. *Annual Report-Carnegie Endowment for International Peace*. New York: Carnegie Endowment for International Peace, 1927, p.27.
- (48) 『開拓者』(日本基督教青年会同盟) 1916-01. 国会図書館サーチ n.d. Accessed May 17, 2019. <https://iss.ndl.go.jp/books/R100000039-I002279128-00>
- (49) Carnegie Endowment for International Peace. Division of Intercourse and

- Education. 1914. Publication. *Some Roads Towards Peace: A Report to the Trustees of the Endowment on Observations Made in China and Japan in 1912* by Charles W. Eliot. New York: The Carnegie Endowment for International Peace. <http://hdl.handle.net/2027/pst.000001615715>
- (50) Miyaoka, Tsunejiro. (1915). *Growth of Internationalism in Japan*. Washington, D. C., The Endowment.
 訳注：宮岡恒次郎（1865-1943）東大法学部卒業後、外務省入省後、退官。弁護士。東京ロータリークラブ創立メンバー。ウィリアム・モースやバーシヴァル・ローウェル、フェノロサらと親交があった。
- (51) 訳注： *The basis of durable peace*, written at the invitation of the New York Times, by Cosmos. New York: Charles & Scribner's Sons, 1917. "These papers were originally printed in the New York Times of November 20, 21, 22, 23, 24, 25, 27, 28, 30, and December 2, 4, 6, 9, 12, 15, and 18, 1916." -Publisher's note 『永続すべき平和の基礎』 煙山専太郎 訳 早稲田大学出版部 1917
- (52) 訳注：吉田昭子（2015）東京市立日比谷と図書館カーネギー国際平和財団文庫—その寄贈経緯と概要『図書館は市民と本・情報をむすぶ』池谷のぞみ [ほか] 編 東京：勁草書房、p.69-77
- (53) Ota, T. (1924, April 22). Letter from Ota to Jones, April, 22, 1924. Carnegie Endowment for International Peace. New York and Washington Office records, 1910-1954. Box 306, International Alcoves, 1919-1925. Carnegie Endowment for International Peace Archives, Columbia University Libraries. Jones, A. H. (1924, May 15). Letter from Jones to Ota, May, 15, 1924. Carnegie Endowment for International Peace. New York and Washington Office Records, 1910-1954. Box 306, International Alcoves, 1919-1925. Carnegie Endowment for International Peace Archives, Columbia University Libraries.
 訳注：太田為三郎 帝国図書館、台湾総督府図書館勤務後、東京商科大学（現・一橋大学）図書館勤務。日本図書館協会会長など。
- (54) Rotarian make gift to library *Heraldo de Brownsville*. October 16, 1938. p.5.
- (55) Tinkham, G. H. (1933) Nicholas Murray Butler's Attitude 'Seditious'. *Milwaukee Sentinel*, February 26, 1933.
- (56) 訳注：Sigrid Arne. (1948) *United Nation Primer*. New York: Rinehart
- (57) 訳注：Select Committee to Investigate Tax-Exempt Foundations and Comparable Organizations は、1952年から1954年にかけて、米国下院に設置された委員会。委員長の名前をとってコックス委員会およびリース委員会とよばれる。しかし、マッカシー上院委員会の影に隠れて、その報告書の影響力は強くはなかったといわれる。
 US Congress. House. Special Committee to Investigate Tax-Exempt Foundations. (1954). *Tax-exempt Foundation. Report of the Special Committee to Investigate Tax-Exempt Foundations and Comparable Organizations House of Representatives Eighty-third Congress second session on H. Res. 217. 83rd Congress*. US Government Printing Office.
- (58) US Congress. House. Special Committee to Investigate Tax-Exempt Foundations. (1954). *Tax-exempt Foundations: Hearings before the Special Committee to Investigate Tax-Exempt Foundations and Comparable Organizations. 83rd Congress*. US Government

Printing Office, p.1

- (59) Fulton, W. (1951, Oct. 15). Foundations Wander into Fields of Isms. *Chicago Daily Tribune*, p.1
- (60) Foundation Inquiry. (1952) December 11, 1952
- (61) 訳注：Kenneth W. Colegrove (1886-1975) ノースウェスタン大学教員。国際政治学者。
Parliamentary Government in Japan. Boston: Northwestern University, 1927. *Militarism in Japan*. World Peace Foundation, 1936. などの著作あり。1946年3月に日本国憲法策定顧問として来日。ニューヨークタイムズ紙は右翼政治学者として死亡記事を掲載している。Prof. Kenneth Colegrove Dies; Right-Wing Political Scientist. *New York Times*. Jan. 4, 1975.
- (62) 訳注：Pearl S. Buck. (1931) *The Good Earth*. London: Methuen & Co.
『大地』パール・バック 著 新居格 訳 東京：第一書房、1935
続編の『息子たち』『分裂せる家』とあわせて3部作。中国を舞台とし、貧農の主人公は地主の娘と結婚して豊かになるが、美しくない妻が疎ましくなり愛人のところへ出入りしているうちに洪水などが起こり没落していく。知的障害のある娘を溺愛して、行く末を案じる主人公をとりまく家族の話。作者は1938年にノーベル文学賞を受賞。

翻訳および訳注担当：井上靖代（獨協大学）

（すていーぶん・ういっと。

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校准教授、一橋大学客員研究教授）